

多様性とは何か—乙武洋匡の抱く日本社会への想い—

早稲田大学政治経済学部 3年

石田 愛・竹俣 紅・松平親保

高橋恭子ゼミ 9期生の私達は、社会の分断が叫ばれる中で「多様性」とは何かを考えるべく、早稲田大学政治経済学部の先輩であり、多様性という概念を認め合える社会の実現に向け活動されている乙武洋匡さんにお話を伺いました。



乙武洋匡（おとたけ ひろただ）

1976年4月6日 東京都生まれ。1998年、早稲田大学政治経済学部在学中に出版した『五体不満足』が600万部のベストセラーに。卒業後はスポーツライターとして活躍。その後、教育に強い関心を抱き、新宿区教育委員会非常勤職員「子どもの生き方パートナー」、杉並区立杉並第四小学校教諭を経て、2013年2月には東京都教育委員に就任。教員時代の経験をもとに書いた初の小説『だいじょうぶ3組』は映画化され、自身も出演。続編小説『ありがとう3組』も刊行された。『だから、僕は学校へ行く!』、『オトことば。』、『オトタケ先生の3つの授業』、『車輪の上』、今年11月発売の『四肢奮迅』など著書多数。2014年4月には、地域密着を目指すゴミ拾いNPO「グリーンバード新宿」を立ち上げ、代表に就任する。2015年4月より政策研究大学院大学の修士課程にて公共政策を学ぶ。現在は、AbemaTV『AbemaPrime』の金曜日メインMCを務めるほか、義足プロジェクトに取り組んでいる。

■ 「障害者」にまだまだ特別な意味を持たせてしまうメディア

竹俣：「24時間テレビ」（日本テレビ系）について、過去にメインパーソナリティーのオフア

ーをお断りしたとツイッターでおっしゃっていましたが、今はこの番組についてどのような考えをお持ちでしょうか。

乙武：肯定的でも否定的でもなく、偏りがあるなという風にとらえています。というのも、障害者と一括りにいってもやはりいろいろな側面があるからです。もちろん、障害のある人が何かに取り組む姿は、その本人が意図をしているいなくにかかわらず、それを観る人の感動を呼ぶという側面は間違いなくあると思うんですね。ただ、「24時間テレビ」に関して言うと、そこだけに特化して何十年も放送し続けてしまっているという偏りは、やはり否定できないのかなと思っています。

「バリバラ」(NHK)という番組は、その「24時間テレビ」の偏りを補完する役割を果たしているのかなと思っています。実際の日常生活でどんなことが困っているだとか、逆に障害を笑いにすることであるとか、障害者の性に関することであるとか、これまでのメディアではあまり扱われることが無かった側面に積極的にスポットライトを当てて特集を組んでいるという意味では、一当事者からすると、素晴らしい番組が出てきてくれたなという風に高く評価をしています。

この番組が「24時間テレビ」と同じくらい多くの人に観られるようになれば、とても世の中バランスが良くなるのかなと思うんですけども、まだまだ知名度というか視聴率、観る人の数が圧倒的に「24時間テレビ」の方が多数で、「バリバラ」を観る人がごく一部という状況では、なかなかその偏りは解消されていかないのかなという印象を持っています。

竹俣：私たちの間でも、「24時間テレビ」というものは、プラスな面でもマイナスな面でもすごく大きな存在になっていて、影響力が他の番組に比べて大きい状況ですよ。

乙武：もう日本でいうと、夏の甲子園と同じくらい日本の夏の風物詩になっている側面があると思うので。

石田：「バリバラ」とかを観ない層が、「24時間テレビ」だと観るように思います。私はジャニーズが好きで、生まれて間もない3歳・4歳の頃から、親が「24時間テレビ」をつけて、SMAPも出ていて。障害者特集のような真面目な番組は観ないという人にも観させるような番組という意味では良いと思いますけど、やっぱり内容が、というところですよ。

乙武：もう一つ言うと、やはりあの番組の本質はチャリティ番組であり、毎年ものすごい額の寄付があります。その寄付金によって、例えば全国の障害者施設に福祉車両が多く届けられたりするというプラスの側面もやっぱり合わせて考慮しなければならないのかなと思います。そこはやはり評価されるべき部分かなと。本当に、「バリバラ」的な内容を「24時間テレビ」の中でもやってくれればバランスとれるのかなという

ところですかね。

石田：ツイッターで「24時間テレビ」でも超最新の義足とかそういうものを放送すれば良いのと言っている人がいるのを見たことがあります、そういうものもということですよ。

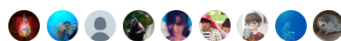
乙武：それこそ、「バリバラ」がやっている S-1 グランプリ、障害のある芸人さんのお笑いナンバーワンを決めるコーナーを「24時間テレビ」の中でこそやるとか、例えば最近で言うと「OriHime」という分身ロボットがあって、そのロボットにはカメラ・スピーカー・マイクが内蔵されていて、家の中で寝たきりの障害者の方でも視線で操作をすることによって、コミュニケーションを図ることができるという分身ロボットがあるんですけども、去年それを使ってカフェの店員さんを務めて、10年間家を出ていない人が10年ぶりに仕事をしてお給料を得たなんていう話もあったりするので、そういう紹介を「24時間テレビ」の中でするとか、障害者本人のチャレンジによって感動させる、感動を与えるという企画以外の切り口で、もっと障害者という存在にスポットを当ててもらえるとバランスのとれた番組になるのかなという気がします。

竹俣：「24時間テレビ」についてのツイートの際に、パラリンピックのテレビ中継についても触れていらっしやいましたよね。

24時間テレビを放送するのと、パラリンピックを24時間放送するのと、どっちが障害者理解が進むのかな・・・

22:52 - 2012年8月23日

12,481件のリツイート 1,852件のいいね



462 12,481 1,852

乙武：あれの真意は、おそらく皆さんから「それはパラリンピックですよ」という答えが返ってくるだろうと予測して、実際その通りだったんですけど、僕はどちらも進まない、どちらも偏りが出ています。健常者の皆さんがオリンピック選手のようにになれるかといったら、「いや無理です、あの人たち特殊ですから」と思うのと同じように、パラリンピアンが障害者の代表かということ、「いやいや、あんなのは特殊な人たちですから」ということなんです。超優秀な特別な人たちなので、あれを見て、「障害者ってこうなんだ」と思われても、それもまた一面的なんです。「24時間テレビ」だけでもダメだし、パラリンピックだけでもダメだし、そういった意味で、「バリバラ」的な扱い方をすることでそのバランスがとれるということだと思っただけですよ。

竹俣：パラリンピックの放送時間は、オリンピックに比べると少ないのが現状ですけれども、やはりそこは増やしていった方が良いと考えられますか。

乙武：それこそ皆さんが今後就職をしていくかもしれないマスコミというのも、当然ビジネスをやっているんで、視聴率を取れなければスポンサーは集まらないし、スポンサーが集まらなければ番組は作れない。そういった意味で、やはりオリンピックに比べて正直数字の取れないパラリンピックを同じ時間だけ放送するというのは、さすがに無理があるのかなと思いますね。

ただ、もう少しテレビ局にも、「コンテンツとして育てる」という意識はあってもいいのかなと思っています。今では“なでしこジャパン”としてすっかり定着した女子サッカーも、実はワールドカップで優勝したのをきっかけに愛称も定着したし、皆さんに知られるようになったし、その後ゴールデンタイムにまで放送されるような人気コンテンツになった。でもあのワールドカップで優勝するまでは、まったく不人気競技だったし、ましてやテレビ中継されることなんかもなかった。でも、選手も同じ、ルールも変わっていない、つまり何も変わっていないのに一気に人気に火がついたわけですよ。という風に、これまでとても数字が取れないだろうと思われていたコンテンツでも、やりようによっては火がつき、十分に数字が取れるコンテンツになる可能性というのはあるはずなんです。

パラリンピックも、すべての競技というのは難しいと思うんですが、競技によっては十分夜7時台に放送しても、皆さんが「これは面白い」と思って数字が取れるようになるコンテンツになりうると思っています。少しずつ深夜放送か何かでファンを獲得していったら、ほら、バラエティでもよく深夜で観測気球を打ち上げて、だんだん人気が出てきたらゴールデンに昇格するというケースもあるじゃないですか、それと同じように深夜枠か何かで放送して、ルールを説明したり、スター選手にフィーチャーした特集なども組んだり、じわじわ火をつけて昇格させていくなど、コンテンツとして育てていくということをテレビ局の方には意識してやってもらえたらいいのかなと思っています。

竹俣：「24時間テレビ」の中で障害をテーマとしたドラマが放送されたり、最近ですと「パーフェクトワールド」（フジテレビ系）というドラマが放送されたりしていますが、そういった障害者の方が登場するドラマについてはどう思われますか。

乙武：僕自身は、「パーフェクトワールド」は観ていなかったんですけど、僕の友人のツイッターを見る限りでは、すごく当事者目線に立った良質なドラマだったという印象を受けました。ただ僕の要望を言うと、まだ障害者が主人公なのかという括りなんですよね。というのも、皆さんがこれまで小さい頃から観てきたドラマの中で、障害者が主人公として扱われるドラマって時折目にすると思うんですけど、三番手・四番手くらいの役柄で障害者が出てくるというのはあまりないと思うんですよ。つまり、障害

というものがテーマにならないと登場しない。特別な意味を持たない限り、ドラマや映画には盛り込まれないというところに僕は大きな壁があると思っています。障害ってそもそも日常なんです、私達の普通の友人の中にいるんですという描き方をしたドラマって見ないですよ。ある主演のカップルの相談相手がたまたま車いすであるとか、そういう登場のしかたをするようになったら僕は本物かなと。それは五体不満足を書いた頃から言っているのですが、21年経ってもまだそれは変わっていないというのが率直なところですね。

実際に20年近く前、僕が三番手・四番手の役で、いわゆる夜9時台くらいのドラマに出演するという話がほぼ決まっていたんですけども、そのときに主演をする俳優さんが「障害のドラマにはしたくない」ということから白紙になったことがあるんですよ。アメリカのドラマなんかでは、ダウン症だったり車いすに乗っていたりという人が出演者の一人として普通に登場するドラマや映画は結構あるので、それが社会として当たり前になっているんでしょうね。だから、メディアが先なのか社会がそうなるのが先なのか、それはもう鶏が先か卵が先かみたいな問題になってきてしまうと思うんですけども、そこがメディアだったり、ドラマや映画のネクストステージなのかなという気がしますね。

■障害のある人となない人が別々に育てられてきた日本

竹俣：乙武さんは、海外にもかなり行かれていますよね。海外と日本の違いの中で、特にこれはすごく違ったということはあるですか。

乙武：一番は、町中を歩いているだけで、すぐに“May I help you?”という風に訊かれるということですかね。日本で普通に生活していて、「何かお手伝いしましょうか？」と声を掛けられることはほとんどない。それは日本人が不親切だからではなくて、慣れていないからだと思うんです。特に日本は分離教育といって、障害のある人となない人が学ぶ場所が分けられてきた歴史が長いので、同じ教室に障害のある子がいたという人が少ないんですよ。そうすると、大人になって社会に出てから初めて出会うことになるので、どう接したらいいのかわからない、どう手伝いをしたらいいのかわからないとなる。もしも失礼なことをしてしまったらどうしよう、余計な事をしたらどうしようという気遣いから声を掛けられないというケースが非常に多いように思いますね。

竹俣：小さい子どもに障害者の方について教えるときというのは、これから親になる私たちはどのようにしたら良いのでしょうか。

乙武：これは非常に難しいところで、僕の中でもまだ答えの出ていない問題です。というのも、人によって違うんですよ。まず私なんかは、どんどん訊いてきてほしいと思うので、例えば、親御さんが子どもから「あれなに？なんであの人は手足がないの？」と訊かれたら、「じゃあ本人に訊いてきてごらん」と言ってもらって、子どもに来てもらえたら、「おじさん生まれたときから手足がなかったんだよね」という会話をしたいと思うんですけども、すべての障害者に対してそれがベストなのかというと、やはり触れてほしくないと思っていらっしゃる障害当事者もいらっしゃるわけで、そこで正解というものを提示できないというのが非常にナイーブな問題かなと思いますね。

竹俣：小さい頃、なかなか障害者の方と接する機会もなくて、接する機会がないとそのまま大人になっていったときにどうしていいかわからない状態になってしまうと思うんです。

乙武：そういう意味ではまあ、背が高い人がいたり背が低い人がいたり、太っている人がいたり痩せている人がいたり、目が悪い人がいたり目が良い人がいたりするのと一緒に、足が動かない人がいたり耳が聞こえない人がいるという中で、別にかわいそうな存在でもなく、違いがあって、その違いによってその人が困っている場面があれば、助けてあげればいいし、自分が困っていてその人が手伝ってくれる場面があれば手伝ってもらえばいいんじゃない？という言い方で良い気がしますけどね。

石田：今、日本ですと小学校でも聾学校など何かに不自由がある方が行く学校とそうでない学校がありますが、それを一緒にしたときに、教育を同じように施したら、やはり差が出てしまいますよね。そういうところはどういう方向に向かっていったら良いと思われませんか。

乙武：結論をどうするかは別として、議論のしかただけ一旦提示をすると、日本社会というのはこれまで効率・合理性を重視してきたと思うんです。そういう意味で、障害のある人とない人の学校を分けるというのは、ひとつの合理性だと思うんですね。石田さんのおっしゃる通り、障害のない人はない人だけで勉強した方が効率は良いし、障害者は同じ障害のある人と勉強した方が効率は良い。社会的なコストは下がる。ただ、僕らの人生というのは、学校だけで終わるわけではなくて、学校で教育を受けるといえるのは社会に出るための助走段階であって、その助走段階だけで人生が終わるならば圧倒的にコストは低いけれども、あとで社会という器でいずれ混ざっていくわけですよ。そう考えると、そこで生じるハレーションを少なくしたり、そのハレーションを解消するためにコストをかけたりすることを考えるならば、総合的なコストはどっちが低いのかという議論をした方が良いと思うんです。今は学校教育という限

られたステージだけの議論をしてしまっているから、分けた方が合理性があるよねという結論になってしまっているんだけど、もっと人生を総合的、長期的に見たときの合理性を考えた方が良いのかなと。

竹俣：乙武さんが小学校のときは、野球をするときに「おとちゃんルール」というものを作って野球をしていたと伺ったのですが、一緒にいればいるで、子どもたちってそういう新しい遊び方というものを考えられると思うんですよね。そういうものを作る社会勉強にもなるのかなと私は思ったりします。

乙武：本当におっしゃる通りで、クラスの中にそういう存在がいて、その人も含めて、今までやってたことを成り立たせるにはどうしたらいいんだろうと子どもは柔軟に考えられるんですよね。そういう意味で、むしろ健常児にとってはクラスの中に障害児がいることはプラスだと僕は思うんです。ただ、障害者本人にとっては、これはもう人によるとしか言いようがないんです。僕のように負けん気の強い、健常者に負けてなるものかと思えるタイプの人にとっては、一緒に教室で学んだ方が良いでしょうけど、ただやっぱりそこで気後れしてしまい、いじめを受けてペしゃんこにつぶれてしまうタイプの子だったら、違う環境で勉強した方が本人のためかもしれないし、その辺は非常にデリケートですよ。

石田：ほめられて伸びる子と怒られて伸びる子がいるのと同じようなお話ですよ。

松平：それを障害者の方が自由に選べる段階にはまだ来ていないんですか。

乙武：そうはなっていないですね。たまたまその地域の学校が建て替わったばかりでエレベーターがついていたりスロープがついていたりしてバリアフリーの環境が整っていれば、「じゃあここにどうぞ」と言ってもらえるかもしれないし、昔からの校舎でまったくそういう設備がないところだと、バスに乗って遠くの支援学校まで行ってくださいと言われることもあるし、そういうばらつきはありますね。

■乙武さんが感じた早稲田の“早稲田らしさ”

竹俣：設備という点では、乙武さんが通っていた当時の早稲田大学はいかがでしたか？

乙武：ひどかったです！

一同：（笑）

石田：乙武さんが早稲田大学に入られるときに改善されたみたいなことは？

乙武：されていません。僕が大学3年くらいの時に大学に申し入れをして、色々変わった部分はあります。皆さんは今新しい3号館で快適なんですよ？

（編集注：「3号館」とは早稲田キャンパス内の政治経済学部の校舎。2014年9月、旧3号館の景観継承を意識し外観を再現した新3号館に建て替えられた）

竹俣：はい、エレベーターもエスカレーターもついています。

乙武：僕が通っていたころの3号館は、建物の入り口の時点ですでに5段くらいの階段があって、僕はいつも階段の脇に車いすを止めていたんですけど、雨の日は、車いすは雨ざらしになるし、皆さんの靴でびちょびちょに濡れた階段を僕はお尻でのぼるので、教室につくとデニムがぐちょぐちょに濡れているという状態でした。あと、政経の学部事務所に入るのにも階段があったので、何かの手続きをするたびに車いすを乗降りしていました。そういう事をなんとかしてくださいという申し入れをしました。でも、時代をすごく感じて嬉しかったのは、3号館を建て替える時に当時の学部長の先生からご連絡をいただいて、「今度3号館を建て替えることになったので、図面を見ながらどうしたらよいか一緒に考えてほしい」と。それで先に図面を見せていただいたことがありました。

竹俣：では実際にアドバイスをされたんですね。

乙武：はい。その時に僕がお話したのは、これは確かに車いすで学びたいという学生には非常に便利につくりになっていると思いますが、一点抜け落ちている視点があって、車いすの教員が出てきた場合、「教壇」という言葉があるくらいなので、段差のせいで教壇までたどり着けないですよという事は言いました。学ぶ側に障害があることは想定できていますが、この建物は長年使うものになるので、教える側に車いすの教員が出てくるという事も想定して作ったほうが良いのではないですかという話をさせていただきました。

石田：実は私も4月の頭に結構大きな怪我をして、靭帯と骨折で手術もしたりしたんです。15号館というところの5階で行われる授業をとってしまっていたんですが、教室に

行くことができないので、先生に連絡をとってレポートで代替してもらったりしました。でも結局講義は受けられなかったんです。3号館も当時そのような感じだとは知りませんでした。

乙武：どこの教室へ行くにも、バリアフリーな教室が一つもなかったんですね。

竹俣：物理的な面ではそのような状態だったということですが、精神面、意識の面では早稲田大学はいかがでしたか？

乙武：その面では逆に早稲田は素晴らしいですね！

竹俣：安心しました（笑）

乙武：そこが早稲田っぽいよね！物理的にはしょうもないけど、好きにやって！みたいな（笑）

一同：（笑）

乙武：本当に、当時はこれだけ重度の障害があって大学で学ぶというのが今の時代ほど多くは無かった中で、別に特別視されることもなかったし、見下されることもなかったし。一学生として、一仲間として、どのコミュニティでも迎え入れてくれたというのは非常に快適でした。おっしゃる通り、精神的な面でバリアを感じた経験は一度も無かったですね。

石田：ゼミなどには入られていましたか？

乙武：入っていました。もう亡くなられてしまったのですが、寄本勝美先生という方がいらっしゃって、地方自治のゼミでした。

松平：サークルには入られていましたか？

乙武：サークルは1年生の時だけでやめちゃいましたね。

石田：何に入られてたんですか？

乙武：英会話のサークル「WESS」に2～3か月くらい。あとは「AIESEC」に1年。

竹俣：商店会での活動もされていたんですね。

乙武：そうですね。早稲田大学周辺連合商店会という、早稲田大学の周りにある当時6つの商店会の集合体で、その方たちと街づくりを1年生の秋くらいからやらせてもらっていました。その方たちとは今でも付き合いがあります。

[<https://www.waseda.jp/inst/weekly/features/specialissue-ototake1/>]

■一度は政治の世界を志した乙武さんの抱く社会への想い

竹俣：この夏の参院選で、れいわ新撰組から重度の障害をもった方が二人当選されました。乙武さんは国会議員の務めを「意思決定」と「説明責任」であるとおっしゃっていて、今回のお二人はそれを行うことは可能であるということですが、仮に意思を決定したり、人に説明することができなかつたりする方が当選した場合に、これからどういう風にしていったら良いと思われませんか？

乙武：れいわ新撰組のお二人は、考える能力があり、それから何かツールを使えば自分の意思を伝えることも可能なので、全く問題なく務まると思うし、務まるように整備をしなければいけないと思います。でも、知的障害があつたりする方が仮に当選されたときにどうするのか。それが次の課題、次の議論だと思うんですね。

竹俣：また他の政党がそういった方を擁立することも考えられますよね。

乙武：はい。でも、そんな彼らだって、18歳になれば選挙権が与えられ、投票する権利がある。なら、別に障害があることで被選挙権がはく奪されるわけではないので、立候補する自由はあり、さらにはどういうツールを使おうが、現行のルールにのっとって当選したのであれば、どんな非難の聲が上がるうが、その人がきちんと国会議員として活動していくことが民主主義のあるべき姿ではないのかなと思いますね。そのうちダウン症の方とかが当選される可能性も出てきますよね。

竹俣：乙武さんは、参院選出馬のご予定がありましたけれども、差支えなければ、もし今回参院選に出ていたとしたら、どんな政策を推し進めていらつしゃったか教えていただけますか？

乙武：僕がなぜ様々なことを犠牲にしなければいけなくなると分かっているながらも一度は政治の世界を志したかということ、やはり障害があつたり、LGBTであつたり、生まれついた家庭が経済的に厳しい状況であつたり、日本に生まれたけれどもルーツが海外にあつたり、そういった様々な境遇の人が、全て同じスタートラインから競争ができてい

るかという決してそうではなく、生まれた境遇によって有利不利がある今の日本の社会はあまり健全ではないという思いからなんです。そのスタートラインをできるだけ均等にしていくことをどうしてもやりたくて、僕は政治の世界を志しました。この夏の参院選で争点になった事言えば、選択的夫婦別姓や同性婚というのは、そのことのアイコン的存在で、特に同性婚なんていうのは、たまたま異性愛者に生まれた人にだけ結婚というメニューが用意されていて、自分で選んだわけでもないのにたまたま同性愛者に生まれた人には結婚というメニューが用意されていないのは、まさに生まれた境遇によって有利不利が生じている状態なので、早急に整備をすべきだなと思います。今の話は性的少数者のことでしたけれども、障害や経済的に不利なことがハンデにならない社会になるような政策をやりたいなと思っていましたね。

竹俣：では、今後も政治の世界に？

乙武：うーん、やはりこうして多くの人の信頼を失ってしまった立場なので、それはなかなか難しいことなのかなと思います。ただ政治というのが唯一の手段ではないと思うので、今の自分にできる手段でそういった想いを実現できるような活動をしていきたいと思います。

竹俣：でも、乙武さんに政治の世界で活躍してほしいと思っている人たちもたくさんいると思います。

乙武：ありがとうございます。ただ自分にはできなかつた事をやろうという想いを抱いて、実際にその権利を得た方がまずは2人出てきたので、見守っていきなりたいなと思います。よく、間接民主主義なんだから、当事者があえて議員になる必要はないんじゃないかという声もありますけど、僕は当事者が議員になることの意味は結構大きなものがあるんじゃないかと思っています。

竹俣：それは、当事者の誰かが議員になつたりしないと、国会議事堂自体のバリアフリーも進まないということですか？

乙武：それもあつし、あのお二人以外の議員さんが彼らと一緒に活動することで気づくこととか、街中を歩いたときに見えてくる景色って、やっぱり違ってくると思うんですよ。そうすると、法律も変わってくると思うんですよ。たとえば、一切障害者と触れた経験のない建築家の方と、家族や友人に車いすを使っている人がいる建築家の方って、絶対に設計する建物が違ってくると思いませんか？そういうことだと思うんですよ。そういう人が周りにいない政治家と、いる政治家。彼らで作る法律って、おそらく変わってくる。

石田：私も足を怪我した時に、それまで全然気づかなかったことに気づきました。

乙武：景色変わるでしょ？

石田：こんなこともってというのが本当にあって…特に、足を使えないというのはある程度はわかっていたんですけど、足が使えないことで、上半身をすごく使うせいで上半身が疲れてきちゃったりとか、お風呂に入るのもすごく大変でしたし、電車に乗ったり降りたりするちょっとしたところも怖いですよね。私なんかがわかった範囲ってすごく狭いと思うんですけど、それでも気づくこととかバリアを感じるが多かったので、今回の議員のお二人の周りへの影響はきっとすごいんだろうと感じましたね。

乙武：そうですね。皆さんくらいの世代だと、おそらく小学校の時にバリアフリーみたいな授業があって、車いす体験とかアイマスク体験とかをやっている学校も多いと思うんですけど、意外に思われるかもしれないですが、僕は、それはあまり意味がないと思っているんです。45分、2コマ繋げて90分でもいいですけど、その短い時間だけ車いすを体験しても、小学生は「ちょっと面白い乗り物」としか感じないと思うんですよ。家を出る時から、電車に乗るなり、車いすを15分こいで学校に行くなりして、学校にいても絶対に車いすから立ち上がっちゃいけなくて、授業も受けて、休み時間も過ごして、トイレもそれで行ってもらって。家に帰って、家に帰ってからも絶対に車いすから降りちゃダメで、夜寝るまで一回も車椅子から立ち上がらないという生活をして初めて初めて車いす体験だと思うんですよ。

石田：しかも、体育館の中だけですもんね。

乙武：そう！あんなバリアフリーの場所…

石田：あんなバリアもない場所ですもんね。私も病院の中で車いすで移動していたんですけど、自分で制御しきれないものに乗っていて、ちょっとした坂とかでもすごく怖いですし、ちょっとスピードが出ただけで、止まれないどうしようって思ったりしました。

竹俣：乙武さんが今取り組んでいらっしゃる義足プロジェクトは、障害を乗り越える選択肢を増やそうという想いが込められたプロジェクトと伺っていますが、車いすよりも義足をつけた方が歩きやすい場合もあるということなんですよ？

乙武：そうですね。僕が義足プロジェクトに取り組むことで誤解されないようにしなければいけないと思うことは、決して車いすよりも義足歩行の方が上である、素晴らしいことであるという意味合いで取り組んでいるわけではないということです。先ほどもお話ししたように、やはり僕は世の中にいっぱい選択肢を並べる、どんな境遇の人で

もできるだけ多くの可能性や選択肢を得られる社会にしたいので、そういった意味では車いすがいいと思う人は車いすで移動すればいいし、二足歩行したいという人のために「こういう選択肢も出てきましたよ」ということを提示できればいいなど。それには、“悪名は無名に勝る”ではないですけど、僕のように名前の知れた人間が取り組むことで、多くの人に知られるようになればいいなど。広告塔というのは、あまりいい意味で扱われないことが多いですけど、このプロジェクトに限っては、こういうものが出てきたんだということが広告塔として伝えられたらいいなという想いでやっています。



[2019年11月1日に、義足プロジェクトについての著書『四肢奮迅』を発売されました]

竹俣：最後に、乙武さんが考える「多様性」というのはどんなものでしょうか？

乙武：やっぱり、僕が政治の世界を志した動機としても話したことだけど、どんな境遇の人でも、できる限り平等なチャンスや選択肢が与えられること。これが僕は「多様性」かなと思っています。こういうカテゴリーの人はこれができないとか、こういう境遇だとこれを我慢しなければならないという社会は、「多様性」のある社会とは言えない。その逆を考えれば、どんな境遇の人だって自分の意志で自分の人生を選んでいけることが「多様性」なのかなと思っています。それを自分のできることで実現していけたらいいなと思っています。

一同：本日はありがとうございました。

コラム「車椅子はおもちゃじゃない」(石田)

「車椅子体験はあまり意味がないと思っている。」乙武さんがインタビューでおっしゃっていましたが、私も実を射ている主張だと思います。今年の4月。トランポリンの着地に失敗して右足腓骨骨折と靭帯損傷を負った私は、2週間の入院と手術を強いられ、車椅子での生活を余儀なくされました。車椅子生活で何より怖かったのが、若干の傾斜。左右に傾斜がある道では「車椅子ごと倒れてしまうのではないか」、少しでも坂になっている道では「スピードが出すぎて止められなくなってしまうのではないか」。車椅子を使うことは恐怖との闘いでした。また、最も不便だったのが段差。ほんの数センチの、今まで気に留めたことがなかったような段差でも、断念し迂回をしなければなりません。そして、このような傾斜や段差はほぼすべての道で遭遇してしまうのです。

では、今小学校等で実施されている車椅子の体験は、いかがでしょうか。体育館にコースを設け、車椅子に乗ったままコース上を何周か回るのが、車椅子の体験になっていないでしょうか。体育館とは、運動するための施設であり、傾斜や段差がないように精密に作られています。車椅子の一番の恐怖と一番の不便さを、半ば無視してしまっているのです。

今年の8月に放送された「24時間テレビ」(日本テレビ系列)で、「人と人がつなぐ新しいバリアフリーの形」という企画において、嵐の松本潤さんが実際に東京・浅草の町を車椅子で回っていました。肉体面での辛さ、行動の幅が狭められてしまうという意味での精神的な辛さなど、まさに私が感じた苦悩を彼も感じたようです。松本さんが学校で車椅子の体験をしたことがあるかは私にもわかりかねますが、オンエアからは車椅子を使って初めて気づいたことがたくさんあったことが伺えます。

そもそも怪我した人や障害を持つ人は、足に力を入れることすら難しいので、同じ状況をつくりだすことはできません。そのうえで、本当であれば、家を出るところから夜寝るまで車椅子に乗って生活をしてほしいと乙武さんはおっしゃっていますし、私も同感です。たとえそれが難しかったとしても、学校内で移動をするだけでも、子供たちにとって車椅子が「ちょっと面白い乗り物」から「とても不便な移動手段」に変わることでしょう。

今のバリアフリー教育では、「車椅子の体験」と「車椅子の生活」が切り離されてしまっています。「体験をすれば生活がわかる」という発想を変え、可能な限りで生活におけるシチュエーションを用意することが必要だと思います。現状のバリアフリーへの向き合い方に疑問を投げかけることで、より多様性が実現される社会に向かうことを願っています。

コラム「障害の描き方を着実に進歩させてきたテレビ、次の一手は大胆に」

(竹俣)

メディアはいまだ「障害者」に特別な意味を持たせてしまっていて、ドラマにおいても障害を日常として描くことはできていないといえます。とはいえ、過去を振り返ってみると、その描き方は大きく変わってきていることがわかります。例えば、インタビューでもお話があった「バリバラ」を放送中のNHKでも、1950年代の番組では「障害者＝不幸でかわいそう」という表現があったといえます(*)。また、1996年にフジテレビの月曜9時枠で放送されたドラマ「ピュア」は、知的障害をもつ主人公の芸術的才能と純粋さを描くもので、障害をもつ主人公の直面する困難や葛藤をリアルに描こうとする「パーフェクトワールド」のような昨今のドラマとはまったく異なっていました。このように今と昔を比べてみると、メディアは着実に進歩してきているといえるでしょう。

インタビューの中で、海外のドラマでは、障害のある人が出演者の一人として普通に登場するものも多々あるというお話がありました。障害がテーマとなっているわけではなく、障害のある人が主人公ではない登場人物のひとりとして出てくるドラマを日本のテレビ局も放送すべきだと理想を言うのは簡単です。しかし、現実として、そのような設定のドラマが今の日本の視聴者に受け入れられるのか、今の日本の社会はまだそれをすんなり受け入れるところまで到達していないのではないかと懸念があることは否めません。ドラマの作り手が障害を日常として描こうとしても、登場人物のひとりが障害をもつことが物語において何か特別な意味があるのではないかと視聴者が考え始めてしまえば、どうにもならなくなってしまいます。

メディアは社会とともに、テレビは視聴者とともに、一步一步前進して今に至っています。そして、きっとこれからも前に進んでいくでしょう。ただ、これからのテレビの歩みは、本当に一步一步で良いのでしょうか。コンテンツの選択肢が格段に増え、テレビ離れともいわれる状況の中で、視聴者の意識を大きく変えるような、世の中のさきがけになるコンテンツを大胆に打ち出すという手もあるのではないのでしょうか。障害がテーマではない、障害を日常として描くドラマを放送することで、視聴者にすぐには受け入れられないかもしれないけれども、テレビが視聴者の新しい“当たり前”をつくることができるかもしれないと期待しています。

(*)出典：2016年8月28日放送NHK「バリバラ」<<http://www6.nhk.or.jp/baribara/lineup/single.html?i=239>>

コラム「共に学ぶことの意味」（松平）

自分が乙武さんのインタビューから最も考えさせられたお話が「障がい者とそうではない人の分離教育」の是非についてだ。そして、インタビューを終えた後の自分は分離教育の持つ負の側面について認識せざるを得なくなった。

このことに関して、自分の体験で覚えていることがある。まだ私が小学生低学年だった時だ。当時、自分の通学路で障がいを持ったお兄さんとそのお父さんがよく散歩をしていた。そのお兄さんは散歩中に時々叫び出すことがあり、それがその頃の自分には「怖い」と感じられた。今思えば情けないし自分の理解が足りなかったと思う。その態度を感じ取られたのだろう、連れ添いのお父さんには「怖くないよ、大丈夫だよ」と声をかけて頂いたが自分は足早に帰った記憶がある。そのことを家に帰ってから母に話したら叱られた。なぜ思いやりを持たないのかと。当時の自分はその説教を理解はしたが納得は出来なかった。自分はただ知らなかったのだ、障がい者のことを。知らなかったから怖いと思ったのだ。

もしその頃、自分の学校あるいはクラスに障がい者の子がいて、一緒に生活していたらどうだっただろうか。私は通学路のお兄さんに対して「怖い」という感情は持たなかったかもしれないし、そのお父さんに悲しい思いをさせることも無かったかもしれない。

確かに、障がい者と生活を共にしなくとも、人は成熟するにつれて障がいへの理解は得る。助け合って生きていく必要があると。しかし、それで十分なのだろうか。障がい者のいる空間で生活したことのない人が真に彼らに思いやりを持って接することができるのだろうか。多くの人が彼らとの共生の仕方を身につけないまま大人になる。

では、分離教育は100%否定されるべきなのか。当然そうではない。障がい者とそうではない人が一緒に空間で学ぶ「インクルーシブ教育」について岩崎賢一氏がある記事を書いている。（withnews『障害児が「普通にいる」クラス求め……「インクルーシブ教育」の壁』

https://withnews.jp/article/f0190109001qq0000000000000000W07q10601qq000018555A#parts_13）障がいを持つ子どもがいる三つの家族にインタビューしたこの記事の中で岩崎氏は、支援学級の方が手厚くサポートを受けられて良いという保護者が一定数いることに触れている。つまり、インクルーシブ教育を望まない保護者もいるということだ。その上で、普通学級を選べる選択肢があることが重要だとしている。

障がい者の子供を持つ家族が教育上多くの選択肢を持ち、クラスに障がい者がいるこ

とが何も珍しくなくなった時、日本人の心のバリアフリーは一つ上の段階に進む。

取材を終えて

今回取材をさせて頂き、乙武さんは、御自身が障害を抱えているなかで、「障害者」や「多様性」というものを俯瞰して見られていることに感銘を受けました。多様性についての知見を広げることができ、誠に感謝しております。貴重なお話をありがとうございました。（石田）

公私ともに色々と世間を騒がせた乙武さんですが、今回のインタビューでは、早稲田大学政治経済学部先輩としての背中をきっちり見せてくださいました。ご多忙の中、後輩のためにお時間を割いていただき、感謝申し上げます。（竹俣）

人間は自分が関わったことでないと中々当事者意識を持つことができないと思います。障がいと真っ向から向き合ってきた乙武さんと直接お話しできて、自分も障がいや多様性という問題をより近く「自分ごと」として捉えることができました。貴重なお時間をいただきありがとうございました。（松平）